

〔実践報告〕

海外の保育実践を学ぶ —コロナ禍における学びの工夫—

丸目 満弓・吉澤 貴子・藤井奈央子
津坂 雅淑・平 友希

はじめに

2019年12月に初めて感染者が確認され、その後国際的に感染拡大した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、大学教育は大きな変化を余儀なくされた。「コロナ 大学 授業」をタイトルに用いた論文を検索したところ、2022年11月現在で1495件（CiNii国立情報学研究所の論文情報ナビゲーター）が該当した。2020年から現在に至るまでの3年に満たない期間における論文数であることから、大学教育が感染予防と学修の確保の両立、また学びの効果の最大化をめざし、これまでにない状況をどのように乗り越えるべきかを模索していることが窺える。

文科省による新型コロナウイルス感染症による学生生活への影響に関する実態調査（2021）¹⁾では、オンライン授業に関して不満に感じる割合より満足に感じる割合の方が多いという結果となった。さらに形態についても対面授業をオンラインに同時配信するハイブリッド型、さらにそのハイブリッド型の方法として対面授業とオンライン授業を組み合わせる「ブレンド型」、同じ授業を対面授業とオンライン授業の双方で受講できる「ハイフレックス型」と多様化²⁾しており、今後もオンライン授業の充実に向けた動きは継続して行われると考えられる。

当短期大学においても2020年度は、ほぼ全面的にオンライン授業を実施したものの、2021年度は一部オンライン授業と並行しながら対面授業を中心に実施した。本論で取り上げる卒業研究Ⅰ（前期科目）はいわゆる“ゼミ”であり、対面授業の一つとして実施した科目である。本来のゼミ形式による授業は、学生の興味や関心に基づくテーマやトピックにそった探求のために、学内にとどまらず様々な人に会い、場所に出向くことが想定されるものである。しかしコロナ禍において、ゲストスピーカーに来ていただくなどの対面的なコミュニケーションは難しく、またフィールドワークの計画・実施も困難であった。そこでリフレーミング³⁾の視点による発想の転換から、イギリス、オーストラリア、カナダ、スウェーデンの4か国の海外における保育をオンラインで学ぶチャンスと捉えた授業づくりを行った。本論ではゲストスピーカー側によるふりかえりを中心としながら、実践報告を行う。

1. 授業の概要

(1) 「卒業研究Ⅰ」について

当学科における「卒業研究Ⅰ」は2年次前期科目である。後期科目として「卒業研究Ⅱ」があり、同じ受講者が1年を通して学びを深める。各々の学科専任教員の専門性が反映されつつ、学生の興味・関心に合わせた内容で授業がすすめられている。2021年度は、12人が執筆者のゼミを履修した。

(2) ゲストスピーカーについて

共同執筆者である4人のゲストスピーカーとは、カナダの藤井氏⁴⁾を除いてもともと面識があったわけではない。学生が保育実践を知りたい国として挙げたイギリス、オーストラリア、カナダ、スウェーデンのゲストスピーカーを探すために「国名、保育、日本人、ブログ」などでインターネット検索し、メールやFacebookにおけるメッセージ、Twitterのダイレクトメッセージ、ホームページの問い合わせ機能などを通じてコンタクトを取り、海外での保育実践について授業を行ってほしい旨を依頼した。依頼を快諾いただき、表1のように、2022年の5月から7月にかけて4か国の保育実践について授業を実施した。

全員が日本以外での保育実践があり、その中で日本での保育実践があったのはイギリスの津坂氏のみであった。カナダの藤井氏、オーストラリアの平氏、スウェーデンの吉澤氏3人は、それぞれの国で保育者資格を取得していた。藤井氏は保育専門の留学支援や就職支援など保育者や保育者を目指す学生の支援を行っており、津坂氏は保育園を自身で運営されているほか、保育士養成も行っている。時差については、マイナス1時間からプラス16時間と様々であった。最も時差がないオーストラリアはシドニー時間12時（授業開始は13時）であったが、カナダはバンクーバー時間夜21時であり、スウェーデンは早朝6時、イギリスはロンドン時間早朝5時と生活時間や勤務に影響がある時間帯での実施となった。

表1 ゲストスピーカーについて

授業日	2021年5月31日	2021年7月12日	2021年7月14日	2021年7月26日
担当者	藤井奈央子	津坂 雅淑	平 友希	吉澤 貴子
国名	カナダ	イギリス	オーストラリア	スウェーデン
資格	Early Child Educator (ECE)	Level 3 Certificate in Assessing Vocational Achievement (CAVA)	Diploma trained Child Care Educator	Barnskötare
それぞれの国での保育実践	8年	23年	16年	3年
日本での保育実践	なし	幼稚園教諭（4年） 保育士（8年）	なし	なし
日本との時差（授業時）	+16時間	+8時間	-1時間	-7時間
備考	ホイクベディ（保育専門の留学・就職支援）運営	・教育省許可ナースリー運営 ・保育士養成センター運営		教育学・児童学学士

出典：筆者作成

(3) 授業に向けた準備、授業当日、その後について

前述したように、メールやメッセージでコンタクトを取ったあとは、ZOOMにて授業内容についての打ち合わせを行った。授業は概ね60分前後とし、ゲストスピーカーの希望により予め学生に聞きたい内容を確認のうえ、授業前にゲストスピーカーに伝える場合もあった。授業の様子は大阪城南女子短期大学の公式Instagramや筆頭執筆者が代表をつとめている「子育て支援ソーシャルワーク研究所」のFacebookに掲載した。また授業に関するふりかえりについて、後日さらに補足説明があるなど反復的なコミュニケーションもあった。

2. ゲストスピーカーによる授業のふりかえり

表2は、4人のゲストスピーカーによるふりかえりをまとめたものである。

(1) 依頼を受けたときの気持ちと学生に伝えなかったこと

授業の依頼を快く引き受けてくださった理由として、「日本と海外の保育の違いを伝えたい」という声は全員共通しており、将来の日本の保育を担う学生に対して、さらに保育を担う学生の先にいる日本の子どもたちに対する想いが窺えた。海外の保育に目を向けるきっかけとして良い機会となること、さらに「多文化共生」「子どもの権利」など、担当者個々に伝えたいテーマも見られた。

(2) 授業の内容について

授業内容は多岐にわたっていたが、全員がまず前提となる保育システムや、専門職としての保育者の資格などについて説明したうえで保育実践について話された(写真1)。例えば細やかな保育者の関わりや、状況に応じて保育の日課などスケジュールが柔軟に変更できるのは、配置基準(保育者一人が対応する子どもの人数)が日本とは異なることも大きいからである。また保育についての紹介に関しては言葉だけでは伝わりにくいため、写真や動画を豊富に用いる工夫がされていたほか(写真2)、こちらからの要望として、実際に絵本の読み聞かせや英語の手遊びについても紹介



写真1 カナダの保育所について

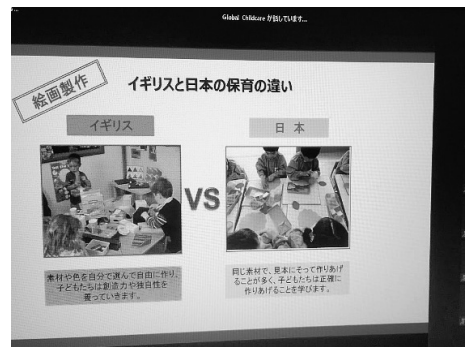


写真2 イギリスと日本の保育の違いの例

表2 ゲストスピーカーによる授業のふりかえり

担当者	国名	働いている（いた）保育施設の特徴	依頼を受けたときの気持ちと学生に伝えたかったこと	授業内容の概要
藤井奈央子	カナダ	<ul style="list-style-type: none"> ・教会の一室にある Daycare center で約7年間ECEとして勤務し、3～5歳児の保育を行った。 ・他に Preschool で1年働いた経験がある ・現在は日本人保育士の海外就職のサポートをしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・カナダと日本の保育の違いを知ってもらうことで日本の良いところ、海外の良いところを将来自分の保育に活かしてもらえたらと思い依頼を受けた ・海外の保育に興味を持ってもえたらと思った ・グローバル化により、日本も今後外国人が増加し、多様な保育のあり方、考え方が求められるようになるため、柔軟な思考を持つことの大切さを伝えたかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・カナダの保育システムについて ・カナダと日本の保育の違い ・一日の流れ ・保育者としての勤務環境の違い（給与事情も含めて） ・英語の手遊び ・感想を発表する時間（アウトプットすることで整理につながるねらい）
津坂 雅淑	イギリス	<ul style="list-style-type: none"> ・渡英直後は約4年幼稚園にて勤務した ・2003年から生後3ヵ月～5歳児までを預かる英国教育省の優良認可デイケアナーサリーをロンドン郊外に設立し国際色豊かな子どもたちが通う地元根付いたナーサリーを運営し、保育にも関わっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・イギリスと日本の保育の違いを知ることで、いい所は積極的に取り入れ将来の保育に活かしてもらえたらとの思いがあった ・若者の海外離れがみられる昨今、少しでも海外の保育に興味を持ってほしいと考えた ・イギリスの幼児教育の理念「みんな違っていい」は保育という場面に限らず人それぞれの生き方にも通じる。就活を控えている学生に、自分は世界に一人しかいない特別な存在であり、自分を肯定し自信をもって欲しいことを伝える良い機会だと思った 	<ul style="list-style-type: none"> ・運営している園の紹介 ・イギリスの教育システム ・イギリスと日本の保育の違い ・イギリス幼児教育指針EYFS ・イギリスの食育 ・海外で保育士として働くにはー就労ビザや求められるスキル、待遇などー ・イギリスで人気の絵本・童謡・手遊び歌やイギリス特有の行事などの紹介
平 友希	オーストラリア		<ul style="list-style-type: none"> ・子どもは未来を担う財産であり、その子どもたちの初めての先生になる保育者の役割は重要である ・自分の経験や想いを学生と共有できたらという思いがあった ・多文化共生社会であるオーストラリアの感覚を、これから必要となるであろう日本の保育者となる学生に知ってもらいたかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・多文化保育について ・体を使った歌や遊び ・絵本の読み聞かせ ・子どもに身近な問題として提起した環境問題について考えた実践の紹介
吉澤 貴子	スウェーデン	<ul style="list-style-type: none"> ・ストックホルムの中心地にある私立のFörskolan（幼保一体化された学校施設）の1～3歳未満児クラス ・勤務3年（講義当時）。園は伝統的なスウェーデンの保育を基本とし、1歳児からプロジェクト活動を中心にケアと教育を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スウェーデンの子どもの権利、声、参加を大切にする教育思想、さらに社会を構成する民主主義を乳幼児期から学んでいくことを知ってもらいたかった。 ・スウェーデンの保育者の働き方を紹介することで、今後の保育を担う学生に参考にして欲しかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・スウェーデンの保育制度 ・園の1日流れ ・保育者の働き方

実際の学生の反応	学生が海外の保育実践を学ぶ意義	遠隔授業のメリット	遠隔授業のデメリット
<ul style="list-style-type: none"> ・学生の明るい雰囲気により授業がスムーズにすすめられた ・カナダで主流のコーナー保育について紹介したときの反応が大きかったと感じた ・授業後のふりかえりから、授業の目的でもあった「違いを知る」「海外保育に興味を持つ」が達成されたと感じた 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間形成の基盤になる大切な幼児期の子どもに関わる保育者だからこそ広い視野を持つことが必要になってくる。そのためには世界中の保育スタイル、保育環境の多様性を知ることが重要だと感じる ・違いの面白さに気づくことが保育を学び続けるモチベーションにも繋がると考えている 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の前で授業をするのは初めての経験だったので緊張したが、画面に向かって話すことで緊張がほぐれて良かった ・世界中で活躍する保育士のタイムリーな情報が得られるのは大きなメリットだと考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・時差の関係で日本の授業時間がこちらの遅い時間になってしまうというデメリットがある ・画面上では生徒の反応が分かりづらい面は確かにある。もし反応が大きいところがあれば、もう少し話を膨らませたりと柔軟に対応できたと感じた
<ul style="list-style-type: none"> ・集中して聴講している様子が窺えた ・授業後のふりかえりでは、多くの学生が日本とイギリスの保育の違いが楽しく学べたと高評価だった ・「もっと自己肯定感を上げて自分を好きになりたい」や「海外で働くことに少しずつ興味が出てきた」といった自分自身の啓発につながるような前向きなコメントも数多くあった 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な国の保育を学ぶことにより、自ら保育方法を選択でき、子どもに提供できることも変わってくる ・海外の保育に興味を持つことは、最終的に海外で学ぶチャンスにつながる可能性もある ・日本の保育のレベルは素晴らしく、それを誇りに思っやりがいのある仕事なんだということも学生たちには実感する機会にもなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・イギリスと日本のように遠距離でも講義ができることは最大のメリットである ・特にコロナ禍のような人の行き来が制限される状況では、その場所にいかなくても学べるこのような機会は非常に貴重である ・ZOOMによる双方向の授業形式により、学生からの質問は講義を遮ることなく受け付けることができ、効果的なタイミングでその質問に回答することができる機能はとても良かった 	<ul style="list-style-type: none"> ・一方的な講義をするにはいいが、インタラクティブな形にするのはなかなか難しい ・全体の様子が分かりにくく距離がある感じは否めなかった ・全体を見ることができ、個々の反応が分かれば、さらに対応しやすい環境になると考えられる
<ul style="list-style-type: none"> ・歌や手遊びも恥ずかしがらずに参加してくれていた ・予め聞いていた質問のなかになかった実践紹介について興味をもち、質問をしてくれた 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本は独特の観念が強い傾向があり、世界の色々なことを見てカルチャーショックを受けることは良いこと ・固定概念に問われず、様々な違った保育方法を見ることができ、良いと思うものは取り入れ、残したいものをそのまま維持をするという自分の保育方法を身に付けることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外の複数の国での実践を聞くことは、学生にとって新鮮で新しい発見がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし
<ul style="list-style-type: none"> ・保育者と保護者との関係に着目する学生が多かった ・スウェーデンでは保育者と保護者が対等な関係で、子どもの発達を支える協働者であることが伝えられた 	<ul style="list-style-type: none"> ・世界的に保育の質が叫ばれる近年、他国の保育や保育をとりまく情勢を知ること、日本の保育を捉える視点が培われる 	<ul style="list-style-type: none"> ・場所、時間、費用にとらわれない学びが可能になり、世界中の講師から学べる 	<ul style="list-style-type: none"> ・学びの学生の反応（理解度、興味など）が見えづらい ・対面で感じる熱量が薄れてしまう

出典：筆者作成

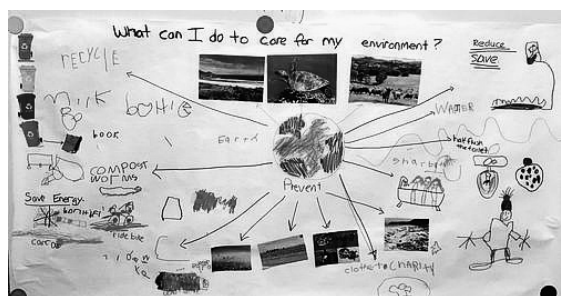


写真3 環境問題について子どもとのディスカッション（オーストラリア）

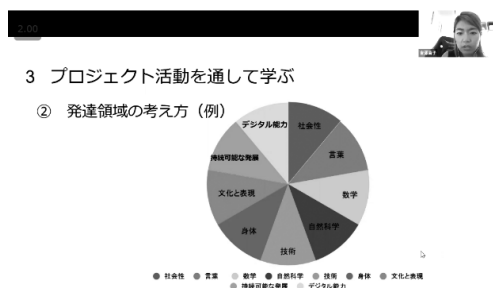


写真4 スウェーデンの保育で取り組まれているプロジェクト活動

していただいた。

また、カナダの藤井氏はコーナー保育について、イギリスの津坂氏は日本の保育所保育指針にあたるイギリスのEYFS (Early Years Foundation Stage) について、オーストラリアの平氏は多文化保育や環境問題について（写真3）、スウェーデンの吉澤氏は子どもの権利や民主主義、プロジェクト活動について（写真4）など、特定のテーマに関する実践の紹介についても学生に興味深い学びとしてしっかりと伝わっていたことが授業後のふりかえりから確認できた。

保育そのものの内容ではないが、なぜ海外で保育を行うようになったかというエピソードや、海外で働く保育者の勤務状況に関する話、学生にとって遠い世界の話ではなくなり、「海外で働くことに少しずつ興味が出てきた」という声も聞かれ、海外に行って保育者として働くことが全く別世界のことと思わなくなった様子が見られた。

（3）ゲストスピーカーが感じた学生の反応

概して学生の受講態度は「明るい雰囲気」、「集中して聴講している様子が窺えた」、「歌や手遊びも恥ずかしがらずに参加してくれた」の評価であった。学生の興味・関心の高さが感じられた部分について、「コーナー保育について紹介したときの反応が大きかったと感じた」、「楽しく学べた（とふりかえりに書かれてあり）と高評価だった」、「予め聞いていた質問になかった実践紹介について興味をもち、質問してくれた」、「保育者と保護者との関係に着目する学生が多かった」など、自身が伝えたいことがしっかりと伝わっている実感や、一方で意外な部分に興味・関心が集まったことへの声もみられた。

また保育以外に「もっと自己肯定感を上げて自分を好きになりたい」という学生のふりかえりをとりあげ、自主性を重んじる海外の保育にふれて「自己啓発につながるような前向きなコメントも数多くあった」と授業の手ごたえも感じられた。

（4）学生が海外の保育実践を学ぶ意義

前述したように授業中の反応や授業後のふりかえりを通して、ゲストスピーカーが感じた学生が

海外の保育実践を学ぶ意義については、保育者としての視野の広がり、保育を学び続けるモチベーション、スキル向上が挙げられた一方で、日本の保育のみに目を向けていたのでは理解できない、固定概念にとらわれない視点から自分自身で保育のあり方を選択したり、模索したりしていくことにつながることで、日本の保育を客観視するために他国の保育を知る意義があり、最終的に日本の保育を誇りに思う部分を見出すことにつながるとの意見もみられた。

(5) 遠隔授業のメリットとデメリット

遠隔授業のデメリットについては、学生の反応が分かりづらい、講師側の熱量が伝わりにくいという、オンライン授業がもつ本質的な問題を感じた声が多かった。また海外と日本を結ぶうえで時差という避けられない要素により、居住国によってはゲストスピーカーの大きな負担となることも、実際に授業を行うなかで明らかになった場合もあった。

一方で、メリットについては「遠距離でも学べる」、「その場所に行かなくても学べることは貴重」との声があった。またオンライン授業のなかでもオンデマンドではなく ZOOM による授業は学生の反応が分かりづらいという側面はあるものの、臨機応変に質疑応答が可能である双方向コミュニケーションの良さを感じた声も見られた。「世界中で活躍する保育士のタイムリーな情報が得られる」、「海外の複数の国での実践を聞くこと」こそ、コロナ禍においても工夫や関係者の協力次第で実現可能な学びにつながったことを示していると考えられる。

3. 課題とまとめ

本実践報告はゲストスピーカー側のふりかえりによるもので、授業を受けた学生側から捉えた学びの内容や効果についても別途分析を実施する必要がある。

しかしながら今回の取り組みにより、海外の保育実践を知ることの重要性をいっそう感じる事ができた。学生にとって、例えば「多文化共生社会であるオーストラリアの感覚」や「スウェーデンの子どもの権利、声、参加を大切する教育思想」を知ることによって「グローバル化により、日本も今後外国人が増加し、多様な保育のあり方、考え方が求められるようになる」保育者が、「自ら保育方法を選択でき、子どもに提供できる」ようになる可能性がある。今回の取り組みを通して、他国の保育実践を知することは2国間、さらに4か国で比較することが日本の保育を客観化・相対化することにつながる事が改めて見えてきた。

単発的な試みで終わることなく、さらに発展させることが今後の課題である。例えばアジアなど、地域性の違う他国の保育実践を知ることにも興味深い。また今回はゼミでの取り組みであったため聴講したのは一部の学生に留まったが、学科の全学生を対象にするなど授業を聞く対象者を広げることにも意義が大きい。さらに「海外の保育」など科目化することで恒常的に得られる学びの機会とすることも有用と考えられる。柔軟な思考によるポストコロナの教育のあり方を今後も模索していき

たい。

注記・引用文献

- 1) 文部科学省 (2021)「新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生等の学生生活に関する調査等の結果について」
https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_koutou01-000015852_9.pdf (2022年11月24日確認)
- 2) 阿部真由美・森田裕介 (2022)「効果的なブレンド型授業の推進を目的としたファカルティ・ディベロップメントの検討」日本教育工学会論文誌J-STAGE Advance published, DATE11. November, 2022
- 3) リフレーミングとは「ある事柄を、今までとは別の視点で見直すこと」(デジタル大辞泉)である。
- 4) 筆頭執筆者は2015年に「社会福祉士・精神保健福祉士海外研修・調査」の助成を得てカナダ・バンクーバーでの視察調査を行った際、藤井氏と面識があった。

(まるめ まゆみ：准教授)

(よしざわ たかこ：Kulturförskolan Smedby Barnskötare)

(ふじい なおこ：ホイクペディア Early Childhood Educator (ECE))

(つさか かよ：Bambini Nursery/Global Childcare 代表理事/国家資格公認アセッサー)

(たいら ゆき：シドニー市内保育所 Diploma trained Child Care Educator)